

「\_\_\_\_\_」は、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編及び  
中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編より引用

「新しい道徳」①より

このように、「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方」とは、私たちが行う一つ一つの道徳的  
行為、即ち良心に従った義務の遂行の、その先にある「人間としての誇りや人間愛」をもって「崇高な  
人生」をめざして生きていくことなのです。

それでも、私たちは、「誰でも、自分に自信がもてなかつたり、劣等感に悩んだり、誰かを妬んだり、  
恨んだりすることがある。欠点や弱点がない人間はいない。ありのままの人間は、決して完全なもの  
ではない。誰の心の中にも弱さと醜さがある。自分を律することができず、ついつい怠けてしまうことも  
ある。してはいけないことと知りつつ意地悪なことをしてしまうこともある。自分の利益を最優先にし  
て、他人の不利益を無視して行動してしまうこともある」「…時として様々な誘惑に負け、やすきに流れ  
るときもあるが、誰もがもつ良心によって悩み、苦しみ、良心の責めと戦いながら、呵責に耐えきれな  
い自分の存在を深く意識する」「人間の強さと気高さは、弱さと醜さと決して離れているわけではなく、  
言わば、表裏の関係ということになる」「…自己の弱さや醜さと向き合うことがなければ、気づくこと  
ができない自己の強さであり、気高さである」劣等感、妬み、恨み、怠惰、意地悪、自分勝手…これら  
は、どうして、自分で感じられるのでしょうか。

それは、良心からの声があるからです。良心からの声が聞こえて、初めて、自分の弱さや醜さを感じ  
られることができるというのです。つまり、良心からの義務の遂行の指令に対して、「私」は、自分の都合や言い訳などの理由を盾に抗ってしまう。それに対して、良心は、「どうして、よいことをしないのか」「なぜ、逃げるのか」などと言って「私」を責めるのです。その責めの中で、「私」は「自己の弱さや醜さに向き合う」ことができるというのです。

逆に言えば、良心からの声がないと、「自らの弱さと醜さと向き合う」こともなく、当たり前に行いとなってしまうということなのです。「自分なんかどうなってもいい」「あの人はいいよな」「あの人のせいで私はこうなってしまった」「人を押しつけてでも自分さえ幸せになればいい」ということを、何の疑問もなく、「それが私の生き方」となってしまうのです。このような生き方は、「人間としての誇りや人間愛」をもって「崇高な人生」とは、真逆であるといつてよいでしょう。

私たちは、「しかしながら、同時に、人間はその弱さと醜さを克服したいと願う心をもっている」のであり、「こうした苦しみに打ち勝って、恥とは何か、誇りとは何かを知り、自分に誇りをもつことができるとき、人間としての生きる喜びに気づくことができる」「…ここでいう人間として生きる喜びとは、弱い自分を乗り越えるだけでなく、自分の良心に従って生きることであり、人間のすばらしさを感じ、よりよく生きていこうとする深い喜びである」のです。私たちには、よりよく生きていく道が開かれています。自らの良心からの声にしっかりと耳を傾けるのが、その道への第一歩なのです。